



ベラルーシブルーをそのままに映して
草原のまっただ中に、その名も「清らかな湖」

自転車で行ってきた少年達が泳ぎ始めた
広い空に向かって、思いっきり水をはじく

大地、森と草原、畑地には収穫された麦の束
大空、秋に向かう雲はゆうゆうと浮かぶ

日の光に湖の水をかざすと
小さな命がふわっふわと泳いでいた

チエルノブイリで見たたくさんの命たち
ゆっくりとあるがままに出会い、そして別れ

特集 1

J I M-N E T、今後のイラク医療支援



9月4日アンマンにて第3回 JIM-NET 会議が開催された。
イラクより、協力関係にある5つの病院ともうひとつの大学病院
も加え、総勢12名のイラク人医師たちと、バスラで院内学級を
していたイブラヒム先生にも参加いただいた。
J C Fからは鎌田理事長、神谷事務局長、井下医師が参加して、
今後イラクの小児がん患者たちをどのように支援していくか有意
義な議論が交わされた。



65号 秋

CONTENTS

特集1 J I M-N E T、今後のイラク医療支援

暴力の連鎖を断ち切れ<鎌田実>	6
第3回アンマン会議報告<井下俊>	10
映画『亀も空を飛ぶ』岩波ホールで上映	16

特集2 2005年夏・J C Fスタディツアー

初の海外医療支援活動の新しい風<廣浦学>	18
おお！愛しのウジー<鷹野和美>	26
こんにちは、ベラルーシ！<カ丸邦子>	28
ヒロシマからチェルノブイリへ	34

連載随筆「子供部屋」<宮尾彰>	36
ジーマのロシア小話	38
ベラルーシの食卓	40
モスクワ便り	41
ナージャの輪通信	42
振替用紙のメッセージから	44
ありがとうございました	46
チェルノブイリ 10 ドリームズ 10	49
出会い Встреча	50
『にがい涙の大地から』上映会報告	57
貝原浩さんを偲ぶ	58
Здравствуй те！(事務局広場)	60
ニュースクリップ	62
本の紹介 Book review	64
チェルノブイリ 20 周年イベントのお知らせ	66
事務局日誌	67

表紙写真 本橋成一



イラク緊急報告

—暴力の連鎖を断ち切れ—

鎌田 實 (JIM-NET代表)

第3回アンマン会議のために9月はじめにヨルダンへ行った。暑い、40度を越えている。外へ出ると肌が焼けそうになる。しかし、家の中に入ると涼しい。湿度が低いのでカラッとしている。ホテルの中は冷房がいらなかった。一泊だけのあわただしい旅だった。この街を訪れるのは、この1年間で3回目だ。イラクのドクターが12人、危険なイラクを脱出してきた。最近のイラクの市民生活や医療状況を報告する。

日本イラク医療ネットワーク (JIM-NET) という7つのNGOの連合体をつくった。JCFもその参加NGOの一員である。話は飛ぶがJCFは今、NPO法人格を申請していて、近々認証される。JIM-NETの事務局はJCFの一角に置かれている。

アンマンに井下俊医師とJVCの原文次郎さんが常駐して、イラクのドクターたちから依頼があった薬を毎月送っている。

イラクの医師たちの感染症対策などの研修プログラムをヨルダンのがんゼンター病院を借りて行い始めた。

ヨルダンで治療を受けているイラクの白血病の子どものために、勉強を教えてくれる先生を雇った。イブラヒム先生は、イラクの南部の町バスラで学校の先生をしていた。つい最近、妻を白血病で失った。3人の女の子をイブラヒムに残してあの世に逝ってしまった。双子の女の子を生んですぐだった。彼の心はまだ癒えていない。傷ついた心で、妻と同じ白血病の子どもたちに勉強を教えている。子どもたちの心の支えにもなっている。傷ついたもの同士、わかりあえるのだ。いい先生をしてきている。今回のカンファレンスの終わりに、イブラヒム先生に感謝状を贈った。彼の心も癒してあげたかった。早く平和なイラクがもどることを祈る。

どんな時でも教育は重要だ。未来

への希望につながる。子どもたちが成長して、また同じ銃を手持たないように、ぼくたちは、今、薬と一緒に子どもたちに未来を送りたいと思っている。温かな支援が暴力の連鎖を断つことができると思いたい。

バグダッドから来た小児病院の医師が言った。

「劣化ウラン弾が使われるようになってから、イラクでは白血病の子どもが増えています。私たちイラクの医師は、目の前で苦しむ子どもを救いたくても救えていないのが現状です。子どもを亡くして途方に暮れる家族を見るたびに無力感に苛まれます。日本から最新の光学顕微鏡が届きました。複数の医師がデイスカッションできるようになったので、正確な診断と治療が可能になりました。若い医師の指導にも役立っています。彼らの死因のうち一番多いのは感染症。二番目が出血です。もうすぐ、血液成分分離機も届く

と聞いています。これで出血を防げます。多くの子どもを救えるようになるでしょう。感染症の予防対策も始まりました。看護師が研修を受けました。感染症対策に必要な備品も届きました。

辛い時に声をかけてくれるのが真の友人という言葉がイラクにはあります。日本から手をさしのべてくださる本物の友人たちに心から感謝しています。」

JIM-NETのカンファレンスに12人ものイラク人医師が参加してくれました。今までの効果的な支援に対する信用で、期待が大きくなっている。

しかし、この1年で状態は変わり始めた。スペインやイタリアの支援が目立ち始めている。白血病の治療もイタリアのプロトコルを使い始めた。日本の支援が見えないという。日本は何をやっているんだという声があるという。小泉さん、もっと、がんばらなく



ちゃあ。

予算のついたイラクの13の病院に支援する、巨額の日本の計画は1年前から、全く動いていない。日本の支援はまだ眠っている。支援するタイミングが大事。相手が苦しい時に、よその国の支援が入る前に手をさしのべる。それが生きたお金の使い方です。小泉首相、この文をお目通しいただく幸運がありましたら、ぜひご一考を。ぼくらに一億円使わせてくれたら、あなたの大好きな日の丸のフラッグを苦しみの中にある4つのイラクの小児病院にはためかせます。国家プロジェクトの大きな支援の前に、すばやい、機能的な支援を、ぜひNGOにさせてください。純ちゃん、待っています。

治安が悪化しているという。内戦状態に近いという。外国から入ってきたテロリストだけでなく、反アメリカ意識の強いイラク人や、シーア派に宗教的対立をするイラク人や、貧しいイラ

ク人がお金でテロに加わり始めた。いくつもの顔の違うテロが生まれている。国全体が荒れだしている。

子どもたちが学校へ行くのに送り迎えが必要になった。医師も、警察や外国人と同じように、テロの標的にされているという。イラク人でも危なくなっている。金銭目的で誘拐される人も多い。無法地帯化している。

最近、食べ物や手に入りやすくなった等、よくなった面もあるが、問題は水と電気だという。病院の衛生状態も悪く、ハエが飛んでいる。下水道が壊れている。きれいな水も手に入りにくくなった。停電が多く、4時間くらいしか電気がつかない日もある。

イラク人は、今、元気を失いだしている。でも、子どもたちに夢を託したい。子どもたちが大人になる頃、イラクがいい国になっていることを願っていると、12人の医師たちが口々に語ってくれた。



平和な国ができるまで、傷ついた子どもや、病気の子どもたちに生きていてもらいたいと言う。イラクの子どもたちに力を貸してください。ご支援を待っています。純ちゃん、イラクの子どものために国のお金を動かさなければ、ポケットマネーでも結構です。政界の仲間は裏切りますが、ぼくらは裏切りません。待っています。

アンマンで行われた、JIM-NET・カンファレンスは医薬品や医療機器の提供、看護師や検査技師のヨルダンでの研修、医師の日本での研修等、8項目の支援を決めた。ほとんどはイラク人医師の要望に応えるカタチで決まった。

お互いの健康を願って抱き合っていた。12人のイラクの小児科の医師たちは夜中にカンファレンス会場を4台の車で出発した。イラクの国境で待機して、朝の8時にイラクへ入る。コンボイのような隊列を組んで、襲撃を防

ぐという。飛行機代が6倍に値上がりして、飛行機には乗れないという。

病気の子どもたちのもとに、無事に着くことを祈った。ぼくは再び1日半かけて遠い日本へ帰る途中にこの原稿を書いている。とにかく眠い。



今後6ヶ月の支援活動を討議！ 急性リンパ性白血病治療向上のために

ヨルダン駐在・医療コーディネーター

井下 俊



◎はじめに

バグダッド教育福祉病院（旧マン
スール教育病院）の1989年から
2000年までの急性リンパ性白血病
（ALL）患者の生存率解析より、ALL
の治療の障害となっている3つの要

- 因があらかになった。
- ① 感染症、出血による治療早期の死亡
 - ② 薬剤不足
 - ③ 経済的困窮による治療からの早期離脱

J I M—N E Tの今後の支援は上記3つの問題点を視野に入れ、少しでもそれを緩和するための援助を行う予定であり、下記の項目を提示し討議を行った。

◎討議内容

- 1、感染予防基本薬の定期的支給
感染予防基本薬として、手洗い用アルコールゲル、イソジンうがい液などを5つの病院を対象に今後半年間定期的に支給することを提示。下記の案で了承を得た。
- 対象病院
① バグダッド中央教育病院
② バグダッド子供教育福祉病院

- ③ バスラ母子病院
 - ④ バスラ・アルサドル教育病院
 - ⑤ モスル
- 配給物品と量を決定
2ヶ月毎に配給予定

2、感染予防専門看護師と検査技師の研修

以下の研修を予定していることを提示、了承を得た。看護師の知識・技術の向上は必要であり、今後も看護師研修を継続的に行う予定であることを述べた。また、検査技師の能力は高く、検査室には研修よりも機材提供のほうが有効であるという判断をしていることも伝えた。

感染予防看護師研修

- ・第1回目（11月～12月施行予定、計3名）バスラ母子病院より2名、モスルより1名招待予定
- ・第2回目（1月～2月予定、計3名）バグダッド中央教育病院、バグダッド

子供教育福祉病院、バスラ・アルサドル教育病院から各1名ずつ招待。
検査技師研修

11月～12月施行予定、計2名。バグダッド中央教育病院、バグダッド子供教育福祉病院。

3、医師の研修

がん専門医のための医師研修の希望が強く、施行する事に決定した。しかしながらどのようなレベルの医師をどの分野で研修を行うかは、各病院のスタッフ事情などに左右されるため、各病院より医師の履歴とプロフィールを自身で書いて送付してもらい、それを元にキングフセインがんセンター（K H C C）のフアリス医師と相談して研修を設定することに決定。今後各病院より1名（計5名）の医師を目標に順次施行していく予定。

4、臍帯血バンク設立に向けての準備

委員会の設立
イラク国内での臍帯血バンク（UCBB）設立に向けて、今回集合した医師たちが中心になって、その準備委員会を作つて欲しい旨提案し受諾された。下記のようなスケジュールでイラク国内でUCBBの設立を促す準備委員会として自ら積極的に働きかけていくことが了解された。

まずはその取り掛かりとして医師1名を日本に招待することを提案。バグダッド中央教育病院のイブラヒム医師を日本に招待し、日本の臍帯血バンクシステムの視察をしてもらうことが決定された。

5、イラク国内患者への経済的支援

治療を妨げているひとつの因子が患者の経済的困窮であり、今後その支援も視野に入れていきたい旨説明した。
薬剤が完全に供給されれば治療費はほとんど無料であるが、現時点では病

院に供給されず闇市場に流れている薬剤の購入をせねばならない。患者の経済的圧迫になっているのはその闇市場での薬剤購入費と、遠方から治療に来る家族の交通費滞在費などであることがわかった。受益者すべての患者とするかあるいは急性リンパ性白血病に限るか、支援額をどれくらいに設定し誰が管理するかなどの問題点があり、平等性の問題で困難であるとの指摘がイラク人医師たちから出された。

また、イブラヒム先生より患者たちの泊まるホテル代などの支援はどうかとの提案あり、今後の検討課題として保留することになった。

6、医療機器の支給

・空気清浄機（層状気流、モバイル型）

アンマンでは入手困難であり、日本からの配送を考慮している。現時点でバスラ・アルサドル教育病院に

2台（民医連からの寄付）、バスラ母子病院に1〜2台（長崎童話館からの寄付）分の資金提供があり、今後日本からの配送を試みることとした。

・輸液ポンプ（点滴タイプ、シリジタイプ）

いくつかの病院から輸液ポンプの支援要請があり、3病院に数台ずつ送ることに決定した。

7、不足薬剤の緊急支援

来年3月までは、JIMNETの参加団体が緊急的薬剤支援を継続する用意のあることを提示した。

・バスラ母子病院へ長崎童話館の資金により毎月配送予定

・バグダッドおよびモスルの病院についてはJVCおよびアラブの子どもとなくよくする会が適時援助

なお、今後薬剤配給が安定しないことには次のステップには進めないこと、日本のNGOによる薬剤支援を継続的に行うのは難しく、資金的に苦し

くなりつつあることを伝え、薬剤や医療機器の購入に当たってイラク保健省を通さずに独自に購入ルートを開発する必要もあることを伝えた。

8、バスラ母子病院での院内学級継続

イブラヒム先生によるバスラでの院内学級を今後も2ヶ月ごとに行う予定である。人材が見つかり、資金的にも可能であれば、今後バグダッドなど他の病院にも同じような活動を拡げて行きたい意向がある旨報告し、協力を要請した。

また、患者の疾患理解と感染予防に関する塗り絵を作成し、院内学級の活動に利用する用意があることを伝え、サンプルを披露した。

9、その他

これまでのJIMNETの活動に対する理解と援助に感謝して、薬剤師のハイサム・オマール氏とイブラヒム・

ニーマン先生に、鎌田代表より感謝状と記念品として扇子を贈らせていただいた。

◎まとめ

（決定内容・見積もりおよび注意点）

以上の討議の結果、今後6ヶ月の支援内容を下記のように決定した。

1、感染予防基本薬の定期的支給

計150万円

①2ヶ月毎に発送。

②1回約50万円（薬剤費＋輸送費）3回予定。

③消費量・キマディアから支給など鑑みて数量変更。

2、感染予防専門看護師と検査技師の研修（計320万円）

①11月より看護師計6名、検査技師計2名の研修をKHCCで施行。
②1名約40万円

3、医師の研修

本年度中計150万円

①11月から目標に1回1名、本年中に2〜3名を目標にKHCCで施行

②1名約50万円

③イラク医師側からのプロポーザルを見てファリス医師と相談。

4、臍帯血バンク設立に向けての準備

委員会の設立（約100万円）

①12月にイブラヒム先生を日本に招待

②費用は招待費用と準備委員会会合の費用援助

③今後の彼らの動きをフォローしながら日本政府などにも働きかけていく

5、医療機器の支給（700万円＋α）

①輸液ポンプをアンマンから、空気清浄機（層状気流、モバイル型）を日本から民医連と共に搬送する。
②輸液ポンプ10台（200万円）、空

気清浄機2台（500万円）

③日本からの搬送時に費用が許す限り他の機材も一緒に搬送する。

6、不足薬剤の緊急支援

毎月200万円程度、各NGO負担

①バスラは長崎童話館の資金でカバーし、バグダッドおよびモスルにはJVCなどがカバーし毎月可能な限り緊急的に薬剤搬送を行う。

②バスラに毎月100万円相当、バグダッドにJVC他により100万円相当

7、バスラ母子病院での院内学級継続（70万円）

①2ヶ月毎（11月、1月予定）にイブラヒム先生をバスラに派遣

②1回35万円程度

③同時にバスラで購入可能な物資をブレイルーム中心に行う。

前回会議決定事項の 進捗状況

前回会議での決定事項の進捗状況についての報告メールが、アンマン駐在の井下医師から届きました。

成分採血装置

発注を8月下旬に済ませ、本日確認したところヨーロッパから数日中に輸送されてくるだろうとのこと。到着したい送金の上イラク国内へ搬送予定です。

感染予防物品支給

第一回目の配給を10月1日予定で配送できそうです。2回目は12月はじめくらいに予定。

看護師研修

11月26日から3名招待予定でKHCCと交渉し、了承を得ました。正式な契約・宿や飛行機の手配は10月末以降、佐藤さんか西村さんをお願いいたします。招待予定の看護師は当初バスラ母

子病院から2名、モスルから1名としておりましたが、現在フランスNGOがバスラ母子病院から4名の研修招いており、バスラ母子病院は来年することとして、モスルとバグダッドの2病院から1名ずつ招待することにいたしました。

検査技師研修

これも11月26日から2名招待予定でKHCCと交渉し、了承を得ております。正式な契約・宿や飛行機の手配は看護師研修と同様10月末以降、佐藤さんか西村さんをお願いいたします。招待予定は予定通りバグダッドの2病院から1名ずつです。

医師研修

11月12日からモスルのリカ医師をKHCCの小児癌病棟に招待予定です。まだ正式契約できておらず来週KHCCと交渉予定です。なお、KHCCで



のイラク医師研修に当初ファリス医師(KHCC小児癌部門のトップ)が難色を示しておりました。フランスNGOが2名の医師を研修に招待しているのですが、まだ若い医師たちであり熱心に研修参加しないようで、KHCCの医師たちはこれに不満のようで研修に同意を得るのがちょっと困難でした。このため今後の医師研修はシニアクラスに近い医師を招待することとして、まずはモスルのリカ医師を提示したところ研修に同意してくれました。

イブラヒム先生ご招待

現在検討中です。日本での滞在期間(12月上旬?) 予定(講演などは?) などわかればご連絡願います。そろそろビザ申請の手続きに入らないといけません。

医療機器寄付

輸液ポンプは計10台購入し、搬送予

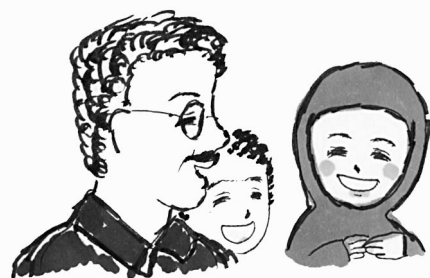
定です。私の滞在中に搬送できればと思っておりますがちょっと無理のようです。クリーンベッドは民医連のバスラ・アルサドル病院への搬送にあわせて、JIMNETでも2台ほど購入しバスラ母子病院へ搬送できればと思っております。日本で購入手続きなどよろしく願います。その他の物品(成分採血装置の使い捨て物品など)も予算内で10月下旬ころには搬送準備できればと思っております。よろしく願います。

薬剤緊急支援

バスラには長崎からの資金で8月以降2回搬送しております。10月分を私の滞在中にと思っていたのですが、バスラから要求が届かず、10月下旬以降にずれ込みそうです。

イブラヒム先生の院外学級

アンマンで継続中です。現在3人の患者が滞在中です。新顔は見られず、KHCCでのイラク人患者受け入れは滞っているようで、今後はアンマン滞患者は減少するだろうと思います。バスラへは11月に再びイブラヒム先生派遣予定です。



特集 2

2005 年夏・J C F スタディツアー



チェルノブイリ事故から 19 年目の今年、J C F の現地への支援も緊急支援から、交流を続けながら医療知識や技術を伝える恒常的支援に変わりつつあります。今回、愛知県の東海医療工学専門学校の学生の皆さんや、長期入院する子ども達と交流しようとする皆さんによって、新たなツアーの形が作られました。

映画『亀も空を飛ぶ』

11月中旬まで岩波ホールで上映

岩波ホールで封切られた映画「亀も空を飛ぶ」がいい。

ガメラではない。クルド人の監督バフマン・ゴバディの新作で、イラク戦争を描いている。同じ監督の「酔っ払った馬の時間」では、経済制裁下のイラクを描いていた。こういう映画を見るたびに「うん、うん」とうなずいてしまうのだ。

NGO関係者の小難しい話もいいが、こういう映画を見れば、目からうろこが落ちる。たくさん落ちるに違いない。

今回、映画館で特別に JIM-NET の宣伝をさせていただいています。

私がイラク戦争で特にこだわったのが「イラン系クルド難民」の支援でした。

難民がヨルダン国境に出てきた 2003 年 4 月から、JVC や JIM-NET を通じて関わり続けています。今まで撮ってきた写真の一部や、クルド難民が描いた絵画などを展示する予定ですのでぜひ映画館に足を運んでください。鎌田實 JIM-NET 代表からのメッセージも展示されています。

佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長)



岩波ホール Tel. 03-3262-5252
<http://www.iwanami-hall.com/>



東海医療工学専門学校学生ベラルーシに！ 初の海外医療支援活動の新しい風

東海医療工学専門学校臨床工学科講師
廣浦 学

初めての学生との旅

東海医療工学専門学校としては初めての海外医療支援活動となった。中部国際空港（セントレア）に集合し9時50分定刻に出発した。韓国インcheon空港経由（乗り換え）でモスクワへ約10時間のフライトであった。モスクワ到着後モスクワ市内で宿泊。翌日は終日観光が組まれており、教会めぐりでロシア史を学ぶ。情緒のある風景や歴史的建築物を眺め造詣を深める？宿泊はモスクワ郊外の田舎町で異国情緒に浸った雰囲気味わう。翌日は郊外の町々を散策し午後モスクワへ向かい、20時発のベラルーシ・ゴメリ行きの夜行列車に乗る。約13時間の夜行列車の旅となった。

8月29日 作業準備

翌日朝10時頃到着しホテルにチェックイン、その後最初の訪問先であ

る放射線医学環境センター病院を訪れる。目的は支援医療機器の配置の確認。リスト作成・メンテナンス・小児科に入院している子供たちへの余興などである。その後ゴメリ州立病院を訪れ、院長室にて渡航目的を説明し院内を見学。翌日からの準備を周知させる。必ずミーティングを実施し状況を把握するようにした。

8月30日 言葉の壁

翌日は3班に分けゴメリ州立組・がんセンター組・チェチェルスク組に別れ班ごとに作業を開始する。支援機器がもつとも多いゴメリ州立ではアシデント発生。がんセンター組では支援機器も少なく順調に点検・リスト記載を終えゴメリ州立組に合流する。チェチェルスク組は病院が車で1時間以上先（高濃度汚染地域）のため終日作業となった。

チェチェルスク地区病院では同行

したJCFスタッフと共に幾つかのプロジェクトが実施されており、充実した内容として報告を受けた。逆にゴメリ州立では事務方の対応に現場と食い違いが生じ作業を実施できない状況が発生した。この病院では以前から支援機器への対応が悪く、また改装工事も手伝ってリスト作成作業も難航した。午後からもその状況は続き作業が中断。言葉の壁やコミュニケーションの難しさを痛感した。

8月31日 盛り上がる交流

3日目は再度放射線医学環境センター病院での作業と子供たちへの余興（学生たちによる手品など）。娯楽の少ない病院でのちょっとした配慮でもあったが、これが好評であり盛り上がった。子供たちの興奮がこちら側にも伝わってきたことは学生達も感じていたようだ。

午後からはJCFと同行したジャズサックス奏者の坂田明氏のボランティ



ア演奏が披露され一時のジャズ鑑賞となった。音楽に造詣の深い人にはたまらないものと思われる。同病院にも小児科の入院患者へのプレゼントを学生達の配慮により渡すことができた。

クリニカルエンジニアを！

支援機器を中心に支えて来たクリニカルエンジニア（ME）の存在はこの国では特に必要であるが、認識が低く現場での支援説明には苦慮している。今回医療従事者養成機関との交流でその点を説きたいと考え、ゴメリ医



科大を訪れる。医学部の学生との電撃的交流会となったが、先方の学生9割が英語を話せず通訳を介しての交流会となった。しかしながら興味を示す学生も多くカタコトの英語が飛び交うなか学生同士の会話は進みお互いの意思の疎通は出来たようだ。こちら側の事前のアナウンスもなかったので戸惑いや日本の医療現場の現状などを示す資料を持参して説明するような時間を作る必要性を感じた。

さすがに幾つかの病院との交流会などスケジュールに余裕がなく、学生には達成感と満足感を味わっている暇はなく帰り支度となった。夜行列車でモスクワに向かい帰国の途に付く。

今後の課題

初めての中国基礎医学研修とは異なり、ボランティア活動の一環としてのウエイトが大きかった。この研修については異論も多いと承知している

が、学生の自主的な活動として周知されつつある。研修引率として参加している筆者（廣浦）も海外医療支援の経験を持ち、各地での活動を通じその必要性を痛感している。特に若い世代（学生）にはそんな経験を踏まえて社会へ出ることも重要と考える。先進国や途上国の事情を知ること、医療従事者としての感性を養うには座学では得られないことが身をもつて体験で有効な方法とを感じる。

今回は海外医療支援活動として企画したが、今後はロシアの臨床工学士に近い資格者（医科大系）との関係を模索し発展させたいと考える。海外医療施設との姉妹提携を視野に入れ、双方の医療技術の交流と人的交流を展開したいと考える。

ゴメリの医療の現状と 人々との交流の中で感じた事

五十島徹也（臨床工学科3年）

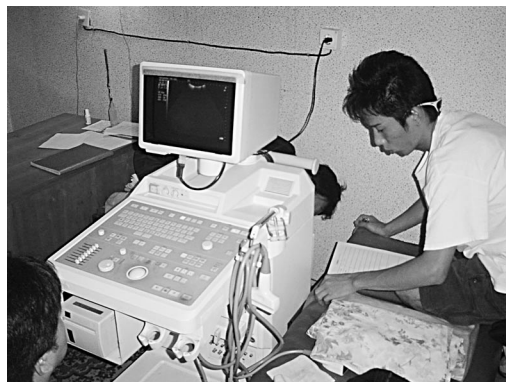
遠くベラルーシの青空の下、私達は現地の医療現場の現状を知り、入院中の子供達との交流やゴメリ医科大学5年生の一部学生との交流会を通して、様々な事を感じると同時にまた考えさせられました。

今回私達のグループは、ゴメリ州立病院と新しく出来た環境センターと呼ばれる病院を訪問しました。私たちの訪問の目的は、日本のJCFというボランティア団体から送られた機器が現在どこでどのような形で存在しているかの把握と、不具合の生じている機器の修理やメンテナンスを行なう事でした。

しかし、ゴメリ州立病院では病院を運営している上層部の人がロシア語

しか話せず、また彼らは送られた機器の所在をきちんと把握出来ていないなど、非常に残念な現状を感じました。そして、この病院内にある医療機器や設備を見ると、現在の日本の医療現場では考えられないような古い機器が使用され、清潔不潔や機器管理と安全に対する概念や意識の違いをととも感じさせられました。

また、現地での医療環境はとても閉鎖的で、現状の技術で治療できない病気が仕方のないものという考え方や、医療に携わる人間の地位や扱いはあまり良くない現実なども知りました。その中で頑張っている一部のドクターに出会い協力を得られた時は、とてもありがたく心強いものを感じさせられました。



チェチェルスク地区病院にて、伊藤君（臨床工学

した。それから、ゴメリの医大生との交流会の質疑応答では、現地の医大というのは、大学は座学のみ行なう場所であり、実習は近隣にあるいくつかの病院に分散して行なうシステムである事。医学生達が、日本やアメリカなど、他国で行われる医療について全く知らな

い事。ゴメリ以外の外国へ留学をする学生がいないなど、私が考えていたものとゴメリの医師を目指す学生達の考え方が違う事も感じました。

そして、環境センターでの病気の子供達との交流は、我々の代表によるマジックや風船を使ったパフォーマンスに歓喜している子供達の笑顔を見る事で、素晴らしい元気なパワーをもらう事ができました。

この旅行で感じたのは、ボランティアはまず現地の医療を知り、現場は何を求めているのか。また、現地ではどの機器を使用する事ができるかを見極める事が必要であると考えます。いきなり日本の高度な機器を持ち込んでも、使用出来ないものや必要ないものであったなら意味がないと考えます。

現地の医療は、日本の前時代的なものです。オペ室では窓から日差しが差し込む状態であり、そこはオペ台と麻酔器・電気メス・吸引器など最低限の

機器で構成され、ICUではモニターと酸素吸入器はあるが、人工呼吸器や透析装置等日本で当たり前にある機器も無く、日本からの機器は変圧器がないければ現地の220Vで使用できない事や、病室の設計上の電気容量が足りないなどの医療機器を使用する為の環境整備が十分にされていない事など、機器管理の概念がない事も強く感じさせられました。

この旅行を通して、今まで廣浦先生をはじめJCFのボランティアの技士さん達がこの状況の中、ずっと現在の関係や状態を作られた事と思います。そこには、言葉の壁や風習・感覚の違いなど言い尽くせない苦労があったことでしょう。我々学生は今後すぐには力になれないかもしれませんが、技士となり様々な知識をつけた上でまた医療支援のボランティア活動に参加できればと考えます。その日までに少しでも英語やロシア語がレベルアップで

きるように自己研鑽に励みたいとも考えています。

最後にこの旅行では、普段では出来ないような体験や、仲間との協力などがえのない貴重な経験をする事ができました。楽しい思い出もたくさんでき、これからの自分の生き方などを異国の地でいろいろ考える事もできていた。このような機会を与えていた、だいて本当にありがとうございます。



ゴメリがんセンターにて

現地で医療従事者としての今後を見つめ直す

西村博章（臨床工学科3年）

84年生まれの自分は事故当時2歳でした。自分にとって「チェルノブイリ原子力発電所事故」は、たまに見かけるテレビの特集や本でしか知る事のできない過去の出来事です。そして日本の遙か遠くの場所での事故である上、海外渡航も今回が初めてだったので身近に感じる事もありませんでした。

そんな自分が今回スタディーツアーに参加したわけですが、実際に事故の被害にあった地域に行きかなり多くの事を思い考えました。

まず「放射能汚染」と言う目に見えないものの怖さと悲しさを感じました。原子力発電所から半径30kmは未だに許可無しでの立入が禁じられ、また事故が原因となった甲状腺がんなどの

放射線障害に苦しむ人が多くいます。人間の感覚では何も感じず、何も変わらない状態なのに遺伝子のレベルで人々が傷つけられたということ、発生から19年の時間が経過しても、事故の影響が様々な面で残っていることが「事故はまだ続いている」という事実を物語っていると感じました。

強く印象に残ったのはエコセンターで出会った子供達の様子でした。15歳くらいまでの子供がおり「自分が生まれる前の事故」の影響による小児がんや白血病などの病気と闘っているわけですが、そのことを全く感じさせないほど元気であり、素直であり、そして明るい子供達でした。

自分たちと遊んでいる時に喜んでいる様子を見ていたら、こちらが元気をもらったような状態になったし、なによりとても楽しい時間でした。そして普段の生活で忘れかけていた大切なものを再認識した気がしました。



チェチェルスク地区病院にて

2005 年夏・J C F スタディツアー参加者のみなさん

●メディカルエンジニア & 学生チーム（8月26日～9月3日）

◎参加学生

五十島徹也 伊藤禎幸 小笠原巧人 岡田俊介 梶間勝善 桜井義弘
柴田典寿 西村博章 江島徹 首藤竜広 田中裕樹 神谷友輔（以上12名）

◎MEスタッフ

廣浦学 小池保寛 西澤英次

◎支援先

ゴメリ州立病院 放射線医学環境センター病院 ゴメリがんセンター
チェチェルスク地区病院

◎交流会

ゴメリ医科大学医学部

●子どもと交流チーム（8月26日～9月3日）

- ・力丸邦子
- ・奥村和子
- ・野口悦子
- ・八田昌久

●20周年記念事業準備&事務局チーム

- ・鎌田實（J C F 理事長）
- ・鷹野和美（長野大学）
- ・坂田明（サクス奏者）
- ・中村雅博（信濃毎日新聞社）
- ・神谷さだ子（J C F 事務局長）



*笹森恵子さん、菅聖子さんがカタログハウスさんの派遣で、
佐藤真紀さんがJIM-NETから参加されました。

事故は「人々の生活のため」に動かされていった原子力発電所で起こりました。本来の目的とは全く逆の結果となつてしまった事故の影響はあまりに大きく、それはいまだに続いており、その現実の厳しさは自分にとって強い衝撃のようなものとして心に感じました。

自分は事故原因や原子力の技術的な事はよくわかりません。でも、実際に被害にあった現場を見て「自分なりにできる事をしていきたい」という思いを強く抱きました。

支援を行う先の病院との交渉やベラルーシ共和国の事情などで一筋縄ではないかない事もあり単純な事ではないと思います。それでも、自分の行う事が人を助ける事に関わるならしつかりやっていきたいと思うし、それは自分が医療従事者として普段働くであろう日本でも、はるか遠くのベラルーシでも変わらないと思います。そして、これ



放射線医学人間環境センターにて

からもチャンスがあればぜひ行きたいと考えています。

私は、この先学校を卒業してから様々な経験をしたいと思います、それをしつかり自分のものとして吸収し、次に行く時は今回よりも充実した事ができればと思います。

最後に、このような貴重な体験の機会を頂いた事に心より感謝致します。



おお！愛しのウジー



4年ぶりのベラルーシ。ソージュ川は相変わらずゆったりと流れているんだろうか？豊かな自然はそのままなんだろうか？どんな懐かしい顔に会えるだろう？チェチエルスクの皆は元気だろうか？覚えていてくれるだろうか？サマシヨロのおじいちゃんやおばあちゃんにはジャガイモの収穫におわれているだろうか？僕自身25回目となるベラルーシ行は、そんな感傷に浸る旅になるはずだった。

ところが、出発前の慌しさは、そんな中年の感傷を吹き飛ばし、支援を始めた14年前のJCF事務局時代に一気に引き戻すことになった。フリージャズの大御所にしてミジンコの研究家である坂田明さんとは一度お会いしただけで、当日の待ち合わせ場所も不明のまま。信濃毎日新聞の中村雅博さんに至っては一面識もない状態。「とにかく成田第2ビルに行け」という神谷事務局長の指令のままに動くしかない

という、一種のミステリーツアーのスタートを彷彿させる出発だった。JCFをはじめとする支援の現状を把握することはもちろんだが、今回の僕の最大の任務は、坂田さんと中村さんをゴメリまで無事に送り届け、坂田さんのミジンコ研究をお手伝いすることだった。もともと大したロシア語をしゃべるわけではないが、なぜか事務局は「鷹野は何とかする」というJCF的信頼（思い込みともいう）でその大役を僕に振り分けてくれた。いざ始まってみると、夜行列車の旅は非常に快適で、食堂車の食事は美味しく、「ストーミリグラム（100mg）」のウォッカとコニャックも格別だった。モスクワから合流したイラクの佐藤真紀さんを加えた夜行列車の旅は楽しく、片言のロシア語を侮やむ間もなく、鎌田理事長の待つゴメリ駅へと列車は滑るように入線した。

ゴメリでは荷物を解く暇もなく、慌

しくチェチエルスクへ移動した。チェチエルスクの池で坂田さんのミジンコ採取が始まったのだが、「人使いが荒いなあ」と言いながら、楽しそうにミジンコの採取と観察をする姿は、昨夜の「酒漬けの坂田さん」から自然科学者へとすっかり変身していた。この旅を通して、坂田さんの頭の回転の速さと、傑出した語学的センスと、人に対する思いやりに、エスコート役の僕自身も幾度となく救われた（本当にお世話になりました）。

一方、チェチエルスク地区病院では、僕は全身に鳥肌がたつような感動に包



地区病院にて、笹森恵子さんと

まれた。14年前に幾多の困難と闘いながら持ち込んだ、アロカのウジー（超音波診断装置）が、現役で稼働していたのだった。当時のソビエト連邦共和国に医療機器を持ち込むことは、ある意味命がけの大プロジェクトだった。実際、僕は無菌室を輸送する際にシュレメチエボ空港で逮捕され、鉄格子の護送車に乗せられて、中央警察で取調べを受けるという経験をしている。「シベリアは寒いだろうなあ、でも信州生まれの僕なら生き残れるかなあ」と変な覚悟をしたことを覚えている。

ひとつの医療機器を14年間使用し続けるということは、現在の日本ではあり得ないし、考えられない。この地の人々がどれほどJCFの支援品を大切にしてくれたかが良くわかる。しかも、彼らは「新しいのをくれ」とは言わず、耐用年数をとくに過ぎたプロローブを「修理してくれ」と言うのだった。JCFの原点に遭遇した気がした。そう、



地区病院で機器点検の小池MEと学生たち

JCFの支援の歴史はチェチエルスクから始まった。もう一度、チェチエルスク地区病院への支援を考える時に来ている気がした。「感動の再会」なんという言葉では表現できない、本当の感動に出会えた旅だった。

鷹野和美（長野大学社会福祉学部教授）



神谷お兄さんのマジックのはじまり、はじまり！

ゆく。程良く難しさもあって興味を持つにはちょうど良い。ジーマは小さな動きもよく見ようと目で追い、よくく見てびつくりする位きれいなボートを折った。折り目正しい細身のボートもあれば、ダルマさんのように転がりそうなボートもある。「みんなで作るおもしろさがここにある」と感じた。1個仕上げて満足そうなその時、「おやつの時間」だと呼ばれて子ども達は行ってしまった。

（今回の旅の目標は、ブレイルールの壁に「大きなひまわりを3本・内二重の花びら1本作り、小さいひまわりを子どもの人数分散らす」というものでした。が、いくつもの目的を持った人が集まっている今回の旅では時間調整も難しく、また病院側の都合もあって、自分のペースでは進まないだろう。ボートはともかくとして小花を作るのはおもしろいが時間がかかる。と、なると日程内に仕上げるのは難しい。それでは子ども達が充分な満足を得られない。中途半端な喜ばせ方はしたくない。と考えて目標変更。大きなひまわりを5本みんなで作ることにして小花

は日本で仕上げて行つた。とにかく子ども達が喜ぶこと、楽しむことだけを考えよう……）

1日目の目標は「一人二個ボートを折る」だったがこれは達成できず。ならばと野口さん奥村さんに手を借りて折れるだけ折りましようとする。イリーナさんも真剣に折り紙に挑戦です。と、そこへ「おやつが済んだから」と子ども達が入って来て次々と折り出す。「これでお昼寝さばれるわ」。看護師さんが追って来て子ども達の口に薬を入れると、カリカリと噛んでちよつと顔をしかめて呑み込んでしまった。そうする間もボートを折っていた。お陰で翌日に予定していた分まで完成。これで一歩も二歩も前進。「また明日」と言葉を交して別れる。

「また明日」これは私の好きな言葉。きょうだけの短い関わりではなくこの楽しさは、また明日に続くよ、と子ども達が掛けたかった言葉、ここの子ど

こんにちは、ベラルーシ！

カネ邦子

素敵な予感

『台風11号は今夜半から明け方にかけて甲信地方から関東地方に上陸』とテレビが報じていた。電車は動くだろうか。成田に無事着く事ができるだろうかと、前夜から不安が募った。東京駅で千葉方面への混乱はあったものの巻き込まれる事なく成田に着き、予定通り日本を離れた。なぜかその時「いい旅になる」と感じた。その直感は大当たりで大変いい旅となった。いくつかの小さな反省点はまたの機会への課



題として自分の心にとめ置いて、ありがたい、嬉しい旅の話を聞いていただきましょう。

一日目の「また明日！」

一日目。エコセンターブレイルルームに着いたのはお昼近く。日本の手遊びでプログラムは始まった。東海医療工学専門学校の学生さんたちがお土産を配り、手品、風船あそびで楽しませてくれた。「何だ?!」「何だ?!」と食い入るように見て、喜んでいた。次の役割の為、学生さん達が退席してから「この壁に大きな花を作りましようね」と語りかけると子ども達は首をすくめてちよつと笑った。が、それは楽しみを期待してのしぐさだとわかった。後から部屋に入って来た家族に「この壁に花を作るんだ」と手ぶりを混じえて話していた少年（ジーマ）がいたから。「?」「?」という顔をしながらも折り紙で花びらにするボートを折って

も達にきよう言えた。

Д о З а в т о р а

大きなひまわり

2日目。花びらを貼る作業から始める。「どうするのか」模造紙にボートを並べて示すとすぐに納得してパツと始めた。「こうして」「こうして」と指示を差し示すと少女たちがうなづいて小さい子たちに伝えてゆく。それがとてもスムーズ。仕事は早い。糊はほんの少し付けるだけ。しつかり貼るためにもっとたくさん糊を付けて―と幾



度か声を掛ける。浮いている花びらはないか、と野口さんが細かな部分に気を配ってくださったことがうれしかった。癖でつい鼻歌が出た。子ども達は顔をのぞき込んでクスクス笑う。おしゃべりしながら笑いながらの作業風景。みんな楽しんでいる。前日折った花びら100個。日本から折って持ってきた花びら100個。これだけあればと二重花びらのひまわりを3本にした。立体感もあり子ども達も満足そう。途中で「ちよつと休憩」と声をかけたが休みなんかいらなくても言うように手を休めない。とうとう絵の具で葉も描いてひまわり5本完成!!。茎や葉を赤や紫で描きたいと言う子どもがいたが、友だちや、のぞきに来た先生に何か言われて葉っぱ色で描いた。仕上がりから使った物を全部きれいに洗って片づけてくれたアーリヤ。何ごともテキパキしていた。大仕事をし遂げたごほうびに♪ふしぎなポケット♪



♪から日本のビスケットと金平糖をもらってにつこり。また明日。

はじける笑顔、そして別れ

3日目。全員でエコセンターに行く。と、1階の売店に来ていたエレーナが姿を見つけて走り寄り抱きついて

きた。可愛らしくてギュッと体を抱きしめる。

お兄さん達に手を借りてひまわりの貼られた模造紙を壁に張る。子ども達が折った花びらだけを使ったひまわりを中央に置いて窓側から張る。「高さはどうでしょう?」と問いかけるといくつものアドバイスが返る。みんなが仕上がりてゆくのを見守ってくれているようだ。そんな中で少女たちはお兄さんに混じって紙を押さえたり並べたり…。どんな時も嬉しそう。張り終わり、壁一面にひまわりが咲いた所で友輔お兄さんの手品。次々とびっくりが続いて歓声をあげ、笑う。柴田のお兄さんと巧みお兄さんが風船に空気を入れる。パーンと割れはしないかとビクビク・怖わごわしながらも触れなくて手を伸ばす。「捻り方を教えて。自分で作ってみる」と積極的に遊びに加わる子ども達。お兄さん達が風船の剣でヤーアツと切りかかる。キャー

キャーと逃げまわる子ども達。一体どれ位ぶりで子ども達は全身でこんなに騒いだのだろう。笑ったのだろう。今、子ども達は喜びの中にいると感じた。興奮の続く中、岡ピーお兄さんがバイオリンで♪エーデルワイス♪キラキラ星♪モーツアルトを奏で心を静めてくれた。なんて贅沢なプログラムでしょう。なんて幸福な時間でしょう。この展開は予想だにできなかった。子ども達の想いを大切に、叶えてくださったて、ありがとうと、学生さん達に幾度も心の中でお礼を言いました。ありがたくて、ありがたくて涙が止まりませんでした。少女たちも涙を流していました。最後に絵本を読んでもらい、子ども達はお兄さん達ひとりひとりから。そして、ひまわり作りを手伝ってくださった野口さん奥村さんからメッセージをいただきました。どの人の言葉もやさしさに満ちていました。楽しかったわづかな時はこれでおしまい。「また明



お別れの歌「私たちに手紙を書いて!」

日」はもうない。別れの時が来ていることを感じとって少女たちはさらに涙を流していました。が、お礼にと時々声をつまらせながらベラルーシの歌を唄ってくれました。

この日学生さん達は朝から大切なプ

ツアーのアルバムより



アナトーリさんのダーチャにて
(右から) 野口さん、桜井君、菅さん、神谷



八田さん、村人と過ごした時間の流れ…



笹森さんとアンナおばあちゃん



坂田さん、泉にミジンコは？

プログラムが組まれていたのですが、子ども達の為に全員エコセンターに来てくれました。それは…

2日目の作業が済んだ時、少女カーチャ(15才)が「あの男の人たちはもう来ないのか？」と聞いた。壁に張る為に3、4人手を貸して欲しいとお願いしておいたので「明日、来るよ」と答えた途端「わあ!!」と跳び上がった



のです。それはカーチャが「弾けた」と思えるほどの喜びようでした。「あした・あした」と。「ウン?…あつ、これは学生さん達の誰かに胸をキューンとさせたな」と感じ、廣浦先生と学生さん達にお願いしてみました。「この15才の少女の、このときめきを大事にしてやりたい。どの人に心がときめいたのかはわからないけれど、もう一度姿を見せてやって欲しい。少女の瞳にその人の姿を映してやって欲しい」と。先生はじめ皆さん快よく聞き入れてくださって素晴らしい最後の日となったのです。学生さん達の間でも「カーチャの相手は誰だ?」「誰だ?」「カーチャはどの娘だ?」「あの娘か?」と、こちらもいつ時心騒いだようです。プログラムがすべて終わってからカーチャのお目当てのお兄さんが判明し、なんと大胆にもカーチャは多くの人が注視する中でお兄さんに熱い抱擁をしたのです!



闘病生活は時に孤独で淋しく、時に辛く悲しいことでしょう。が、しかし、この日の思い出はきつと、少女たちの心の支えとなることでしょう。

エコセンタープレイルームにひまわりの大輪が咲き、少女たちの胸に淡い想いが生まれた今、ゴメリは季節を変えようとしています。

鎌田医師、笹森恵子^{しげこ}さんに聞くヒロシマから
チェルノブイリへ

広島・長崎に原爆が投下され、戦争が終わりました。そして、60年。キノコ雲の下で熱線・熱風に倒され、奇跡的に一命を取り留めた笹森恵子さんの人生は、筆舌に尽くせません。笹森さんたち原爆乙女をアメリカに招き、ケロイドの整形手術をするのに尽力した米国人ジャーナリスト、ノーマン・カズンズ氏の『笑いと治癒力』という一冊が、いのちを問いつける鎌田實先生と笹森さんの出会いを作りました。

8月9日午後7時より松本市中央公民館において、アメリカ在住被爆者の実情を伝えるために来日した笹森さんを招いて、鎌田理事長といっしょにお話しをお聞きしました。そのあらましをお伝えします。

60年前、13歳の女学校一年生の時、広島市内で建物疎開の作業中に被爆しました。すぐ横にいた親友は一瞬にして吹っ飛び、消えてしまった。すさまじい閃光と一瞬おくれた爆風、気がつく足元から人影がぼんやり見え始め、あたり一面は火の海だった。川の方へ逃げると、川にはたくさんの人が棒きれのように流れていました。やっとたどり着いた小学校の木陰に座り込む意識が遠のき、でも朦朧^{もろうろう}としながら、「お水を下さい、千田町の新本恵子です」とくり返し、もう一度言え、きつと誰かが来てくれる、今度もう一回言えば誰かが家に伝えてくれ

る：こうして五日四晩、何も食べず、何の手当もないまま、まさにあちらの世界に足を踏み入れようとした時に、知らせを受けてやって来た母の自分を呼ぶ声が聞こえたのです。全身が焼けただれ、夏の日に五日間放置された火傷は膿みただれ、両親は焼けた皮膚にへばりついた衣服をはぎとり、焦げて炭のようになった皮膚を切り取り、来る日も来る日も膿をとってくれたのです。「恵子さんはまだ生きてるのですか？」という近所の人の言葉が当然に思えるような状況でした。

みんな私のこのケロイドを見て、可

哀相と言うけれど、自分が母親になって実感したのですが、若い娘が全身火傷を負い、顔を焼かれ、その娘の顔の皮膚を切って看病し、ずーっと見ていた母親の気持はどんなに辛かったか、それは私の比ではない。

私の人生はラッキーだと思うのです。家族の中で私以外は誰もけがもせず、家も何とか残り、周りのいろんな人に恵まれました。

あの頃アメリカ人は鬼だと言われていました。ノーマン・カズンズの招きでケロイド治療のため渡米し、アメリカに住んでいるうちに、カズンズの繋がりで平和運動をしている人たちを知り、人間は外見はちがうが、みんな良い心も悪い心も持っている、だから、良い心を見てつき合うことが大切だと知りました。

そして看護師になって、赤ちゃんが生まれる瞬間を見ると、人間の命のすばらしさをあらためて知り、そして

生まれてくる赤ちゃんも、お母さんのお腹から精一杯がんばって出てくるのに、そういう命を抹殺する戦争、非戦闘員までも巻きこむ戦争は、絶対に無くさなくてはいけないと思うのです。

今日会場に来て下さったような小さな方を見ると、どうか元気で育って欲しいと思います。多くの人がみな平和を願い、誰でも元気で寿命まで生きていたいと願っています。皆さん、どうか自分の愛する人が戦争で亡くなったりがけをすることを想像して下さい。

怒った顔はどんな美人でもみにくい。笑えばどんな人も美しい。毎日の生活でユーモアを大切にして、これからも元気な限りどこへでも行って、被爆した人たちが黙っていないで、みんなで声を出し、自分の子どもが私のようにならないように、できることをしていきたいと思っています。

「世界の被爆した子どものために何かしたい」という笹森さんに、8月末、JCFスタディツアーに同行していただき、チェルノブイリ原発事故被災地の子どもたちと交流したり、現地の被爆者救援NGOを訪問したりしていただきました。



遊戯とは、可能性の歓喜である

マルチン・ブーバー



写真提供 本橋成一

チエーホフ晩年の戯曲『桜の園』は、帝政と革命とのはざままで不安と期待に揺れるロシア社会を描いた名作として知られます。舞台は、情夫との国外生活から逃れて、故郷の邸宅に戻って来る初老の婦人貴族ラネーフスカヤを屋敷の召使いが待ち受ける場面から幕を開けますが、ト書きの一行目にこうあります。

「いまだに子供部屋と呼ばれている部屋」

ややあつて舞台に登場する主人公の最初のセリフは次の一言です。

ラネーフスカヤ（嬉しそうに、なみだ声で）子供部屋！

さらに続けて――

ラネーフスカヤ 子供部屋、なつかしい、きれいなお部屋……。わたし子供のころ、ここで寝たのよ。……（泣く）今でもわたし、まるで子供みたいだわ。……。

周囲から、いまにも屋敷が競売に掛けられようとしている現実を繰り返し説かれながら、一幕を通じて彼女はただこの部屋ではしゃぎ回って過ごします。

「子供部屋」は、身を持ち崩してゆく婦人の清純な過去を象徴していますが、はかなく繊細な魅力をそなえた、この芝居の陰の主役なのかも知れません。



写真提供 本橋成一

ピアノ組曲『展覧会の絵』で知られるムソルグスキーは、チャイコフスキーと並んで「もつともロシア的」と言われる作曲家です。独創的な歌曲を数多く残しましたが、その中に7曲からなる歌曲集『子供部屋』があります。乳母と幼児とのあいだで交される戯れのような会話が生き生きと再現されていますが、彼自身がその幼少時に農奴出身の乳母の胸で繰り返し民謡を聴かされて育ったと言われています。この思い出が、後年彼の創作活動の核となりました。「何かしらロシア的なものというのは、まさしく、この家族的なつながり、家族全体の生活をつつんでいるふんわりとした暖かさのことなのである――あるいはそれを、非常に古いもの、どこよりもロシアでいちばんよく保存されていると思われるもの、といい直してもよい。」（ウエイドレ『ロシア文化の運命』）

「乳母と私」と題された、わずかな数分のスケッチのような作品がありますが、その旋律に満ち溢れる親密で奔放な情感は、やがて十九世紀後半以降ロシアで

花開く児童文学や舞台芸術などの「子供部屋の文化」の底流をなしています。

ひるがえって、現代日本の子どもをめぐる環境に眼を向けてみましょう。

愛情に包まれた親子の触れ合いに時を忘れる経験も無いまま、多くの子どもたちは自分の意志によらぬ習い事へと急ぎ立てられて育ちます。私たち大人に、世間体や打算をはなれた眼で子ども本来の「遊戯」を見守るゆとりがいつの間にか失われてはいないでしょうか。

まどろみの内に準備され、戯れの内うちに培われるものが、確かにあるのです。

ジーマの

ロシア小話

◆2人のブロンドの女子友達が立ち話をする。

その1人はメイクアップセットから鏡を取り出し、これを見る。

「この顔はどこか見た覚えがある」

女子友達は

「私に見させて... あなた馬鹿だ、これは私じゃないか」

(注：ロシアでは、ブロンドの若くて可愛い女子が愚かなものとしての評判があり、小話の対象になる)

◆中国軍人はあるとき、アメリカの偵察機に忍び込み、その秘密機材は全部中国製であることが確認し、とても嬉しく思った。



◆2人の男はレストランで注文する。

「こちらのメニューに象の眉の酢漬けを、付け合せに米をくれ」

ちっとも驚かなかった給仕：

「象はインドゾウか、アフリカゾウか、どちらがよろしいでしょうか？」

「インドゾウでいいよ」

給仕はメモして、数分も経たない内に席に戻る。

「当店は残念なことに、お客さんのご注文を果たすことができません」

「なぜなの？」

「米が切れてしまいました…」

◆男性寮は女性寮とはどこで原則的に違うのか。

—女性寮では、食器洗いは食後にするが、男性寮では食前にする。

——ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドット——



АНЕКДОТ



◆Стоят разговаривают две подружки-блондинки. Одна из них достает пудреницу, смотрит в зеркальце и говорит:

-Ой, что-то лицо знакомое.

Подружка:

-Дай посмотрю... правильно, дура, это же я.

◆Китайские военные, проникшие на самолет-разведчик США, были приятно удивлены, обнаружив, что вся секретная аппаратура, находящаяся на его борту, была сделана в Китае.

◆Два мужика пришли в ресторан, сели за столик и делают заказ официанту:

-Нам маринованные слоновьи брови, а на гарнир рис.

-А брови африканского слона или индийского? - без всякого удивления спрашивает официант.

-Давайте индийского.

Официант записывает заказ в блокнот, уходит, но через несколько минут возвращается:

-К сожалению, мы не можем выполнить ваш заказ.

-Почему?

-Рис закончился...

◆Чем принципиально отличается женское общежитие от мужского?

В женском посуду моют после еды, а в мужском перед едой.

8月から9月の初めに、連帯基金恒例のスタディツアーが行われた。今年は、ロシアとベラルーシの2部構成だった。さて、私の旅行会社「旅ツアー」が企画したロシアについて話しましょう。グループは、若者達約20人で、皆ロシアに来たのは初めてだった。彼らは初め何かと聞っているような印象があった。いろんな事に気を遣っているのだった。しかし、すぐに彼らはおおらかで自由な気分になった。それは、旅の翌日に起こった。

朝、私たちはバスに乗って、セルギエフ・ポサードに出発した。この小さな町は、モスクワから1時間の所に広がり、古い教会、ロシア正教の教会の司祭を養成する中心地、14世紀のセルギエフ修道士が基礎を築いた修道院、外国にとっては、最も有名なロシアの伝統的な民芸品—マトリョーシカの工場で有名である。この日は、大きな宗教的祭日前夜だったので、どこでもたくさんの人だった。木造のレストランで昼食を食べてから、有名なロシアの大河ボルガの岸辺にあるウグリチに行った。町の中央広場で、私たちは、古いロシアの伝統、パンと塩で迎えられ、16世紀のロシアの歴史に関係する町の名所に案内された。夕方には、みんな少し疲れた。はやく夕ご飯を食べ、ホテルで休みたかった。しかし、みんなを思いがけないプレゼントが待っていた。私たちは、ロシアの農家、その土地の人の家に招待された。伝統的な民族衣装を着た夫婦が、私たちを玄関で迎えた。家に入り、テーブルに付いた。一人の日本の青年がルバーシカを着せられ、イワンと呼ばれた。この夜、彼は家のおかみさんの兄弟になるでしょうと言われた。ごちそうは、おかみさんが庭で育てた食材でペチカで調理されたものだった。そして、更に、ボルガ河で釣られたとても美味しいお魚とサマゴン…。

夕べは、とても楽しく、みんながいっぱい歌ってダンスをし、家の中や外でいろんなゲームをした。それから、希望者は白樺の枝で蒸されるパーニャ（ロシアサウナ）に行った。パーニャで元気になると、もう誰も眠くなくなった。

雪の冬が来る前、それはロシアでとても美しい季節です。白い雪の風景に白い教会、眠りについた自然はなんてすばらしい眺めでしょう、本物のロシアのパーニャに入り、トロイカに乗るスーズダリにあなたをご招待します。どうぞいらしてください！

イリーナ・ニコラーエワ（JCFモスクワ事務局）



モスクワ便り

ベラルーシの食卓

ゴメリの少女

ベラルーシブルーの大空に雲が浮いている。果てしなく広がる大地。12人の若者達がベラルーシを訪れた。愛知県の東海医療工学専門学校の学生達だ。JCFが支援してきた病院の医療機器を点検整備してリストを作るスタディツアーは、活気にあふれた。マジック、ゲーム、バイオリン、次々に繰り出す一芸に、ワッと歓声を上げた子どもたちがいた。ゴメリの環境センター血液病棟に入院する子ども達。彼らの瞳に映るのは、日本からやってきたお兄さんの手先から繰り広げられるマジックの不思議さ、楽しさ。そして、その後にそっと置かれたものを私たちは感じ取った。

「ゴメリの少女」は「ゴメリチャンカ」。ゴメリチャンカの瞳の奥に、心に、日本の青年達のやさしい笑顔が刻まれた。

今日の一品は「ゴメリチャンカ」新鮮な野菜サラダです。

<材料>

キャベツ 200g、植物油、サワークリーム、マヨネーズ 小さじ2
ウクロップ・ペトルーシカ・小口ネギなど香草、砂糖 少々、塩 少々

<作り方>

1. キャベツを細かく刻む。汁が出るくらいまでもむ。
2. 香草野菜、植物油、サワークリーム、マヨネーズ、砂糖、塩をまぜあわせる。

上にゆで卵を細かく漉したものをかけて、彩りにするとさわやかです。





原子力防災訓練に参加して

笹田 海

(ナージャの輪)

いました。JCO事故を思い出します。

●住民広報（8時45分）

8時20分に臨界事故発生のお知らせが、戸別受信機でありました。

●一時集合場所に集合（9時30分までにとある）

東海村臨界事故から6年目の9月30日、原子力総合防災訓練があり参加しました。防災訓練は東海村の三菱原子燃料工業（株）で臨界事故が発生したという想定でした。臨界事故なので、中性子線、放射能も発生したという想定です。

●事故発生（8時20分）

ヘリコプターが工場の上を旋回して

遠いので自転車で行く。9時頃から集まり始めたようで、ほとんどの人が10分までに集合していました。住民の服装は、長袖長ズボンでした。天気が良かったせいか、帽子を被っている人はいましたが、マスクをしているのは、私だけでした。地区の公民館に集合しましたが、外の駐車場でバスを待ちました。警察官と地区の消防団がいました。事故現場から公民館は1.8kmです。私の家は、事故現場から2.8kmなので、近くに移動してしています。

●バス到着（9時20分）

女性から乗り込む。

●バス出発（9時30分）

消防団の誘導にて、避難所へ向かう。

バスが通れる道路が整備されていないため、事故現場から1kmというところを右折した。

●避難所に到着（10時00分）

中央公民館（事故現場から5.5kmの距離）に到着。係員の人は、すべて白い防護服にビニールの手袋、靴の上にビニールの袋を履いて、手袋と服の間、靴のビニールとズボンの間にはテープを巻いてある。白いマスク（薄い）。住民用には、用意していない。

●受付

災害新聞をもらう。一階広間にて「被災地住民行動記録票」に名前、年齢、生年月日を記入してもらう。

●スクリーニング

一階集会室の3ヶ所で行っている。奥の扉が開いていて、外にホールボディカウンターの車が待機している。スクリーニングは、頭、手、肩、前、後ろ、靴の裏をした。安定ヨウ素剤に関する

確認。（レントゲンの時に、注射をしたか？」と聞かれましたが、ほとんどの方が意味がわからず、何度も聞き直し、「造影剤を注射しましたか？」と言いつつ直されて理解しました。）

●避難所の部屋に行く（10時15分）

二階の部屋に行く。

●説明（40分間）

事故会社から、今回の事故に関する説明と、事業内容。日本原子力研究所から、原子力の話、安定ヨウ素剤の話。

住民避難の様子を県防災ヘリコプターから画像伝達（9時00分～9時45分）していました。命をかけた仕事ですね（かわいそう...）。訓練でも、バスを外で待つということには疑問を感じた。避難バスでの移動では、災害現場にどんなに近づくことに納得がいかない。避難道路を確保したい。（JCO事故後、避難道路建設の話が出たが、消えてしまった。そのとき出た国からの災

害予算は、農家のために使われていた。地元のためには使われていない。）バスは、エアコンを使っていた。

避難所では、受付するのに列が出来てしまうため、入り口が開放されていた。スクリーニングのところでも外側のドアが開放されていて、放射能が入ってくる。この避難所は、二階建てで吹き抜けの造りだから、館内すべてが汚染され続けてしまう。住民用のマスクを用意してほしい。現場近くの小学校も避難訓練をしたが、11時頃に避難所に到着した。訓練でも大人より遅い避難には、納得いかない。

安定ヨウ素剤は、避難所で配布されるから、事故後2時間経過している。安定ヨウ素剤について、以前勉強したときは事故後2時間過ぎてしまったら、服用してもほとんど効果が見られないと説明を受けましたが、今回の県保険予防課の説明によると、3時間以内では50%、8時間以内でしたら40%

の効果があるとのことでした。

今回の訓練に参加した住民は、170名でした。避難所での混雑を考えますと、もともと皆さんの避難所を考えないと意味がないと思われしました。安定ヨウ素剤を手に入れるまでに、あまりにもリスクが多すぎる。臨界事故、放射能漏れの原子力事故を考えると、県全体を考えた避難経路で訓練すべきだと思う。今回の訓練は、行政単位の連絡にということでは、はよいように思いますが、住民の避難訓練ということでは問題が多いと感じました。実際の事故の時に、このような避難マニュアルで住民避難をとられてしまったら...。もともと皆さんの救護所や避難所を考えないと、住民を被曝から助けることができません。現在のままでは、とても一緒には行動すべきでないと考えます。特に、子供たちの避難が遅いことが心配でした。

振替用紙のメッセージから



◎活動が更に大きな実績を結ぶよう祈っています。
(千葉県)

◎イラクの子ども達に一日も早く平和が訪れますように。
(東京都)

◎生まれた命に重軽は無い。どうかどの子どもも幸福に育て♡
(長野県)

◎息の長い活動に感謝しております。
(東京都)

◎いつも心を寄せている存在のあること、その意義をささやかな行動にこめて。
(長野県)

◎世界中の人がおだやかな平和な心で天の川を楽しむ日々がくるように願わずにはいられません。
(千葉県)

◎ものの言わぬ何かに後押しされながら思いをはせ祈りつつ。
(埼玉県)

◎グランドゼロ64号夏：きみの胸の傷口は、今でもまだ痛むか。初めて出会った詩です。胸にこたえました。起こっている事実、忘れずにいたいのです。
(長野県)

◎長崎で被爆して60年、核のおそろし

さがますます大きくなるよう不安です。子ども達の将来が少しでも明るくなりますように。
(神奈川県)

◎少しでも送金できる事を幸せに思います。
(愛知県)

◎大人の起こしたことで犠牲になってしまった子供達。少額ですが、お役立て下さい。
(大阪府)

◎一人でも多くの子どもたちの治療、笑顔につながりますように。
(神奈川県)

◎核兵器廃絶を願って…。
(京都府)

◎素直な心の大人の育成が次代及び今の子どもたちを不幸にしないと考えます。
(新潟県)

◎ささやかな気持ちをどんな環境でも子どもの教育を最優先にしたいと思えます。
(東京都)

◎貝原さんの計報を知り、タチアナ医師が来日された時、貝原さんが優しくに駆け寄って、ハグされた姿を思い出しました、お二人で天国で見守って

下さる気がします。合掌。
(東京都)

◎この夏ヒロシマでの行動に参加してこようと思っています。祈りを真実に！
(京都府)

◎有り難いことが二つありました。私の嬉しい気持ちを少しお届けしたいと思いました。
(千葉県)

◎暑い中毎日お励みいただき頭が下がります。忙しい息子のほんの少しだけの気持ちです。
(千葉県)

◎いつも絵葉書お送り下さいましてありがとうございます。子供たちの笑顔に私も心なごみます。がんばって下さい。
(栃木県)

◎優しさの連鎖にお役立て下さい。

(京都府)
◎「希望」が残っている世界をグランドゼロの誌面から感じることが出来ます。
(茨城県)

◎応援しています、世界の人権が守られますように。
(岐阜県)

◎気持ちばかりで申し訳ありません

が、お役にたてばとご縁に感謝いたしております。
(愛知県)

◎暑い夏でした。世界各地の豪雨、洪水、地震、心が痛みます。
(千葉県)

◎きまぐれがなければ会費
(長野県)

◎ベラルーシの子ども達の環境がもっと整いますように。
(東京都)

◎昨年少しばかり送金させていただきましたところ、ご丁寧なお手紙と年末には可愛いクリスマスカードを頂きまして有り難うございました。微力ながら入会させていただきます。
(兵庫県)





ファストレ-チャ: 出会い

ВСТРЕЧА



召しませお茶を!

昨年10月、松本の中央公民館（Mウィング）で開催された「ぼくの見た戦争」高橋邦典写真展のお手伝いをさせていただいた時のことです。チャイのコーナーの女性が「お茶はいかがでしようか？」と、包み込むような笑顔と暖かな声で呼びかけると、写真展から出てきたお客様がまるで吸い込まれるようにチャイのコーナーに近寄って行きます。そしてお茶を飲み、ほっと一息した時を見計らったようなタイミングで、「材料費のカンパをお願いしています」という彼女の言葉、みんなごく自然にするすると財布を開けて、カンパ箆の中に、看板に書いてある「材料費」以上のカンパを入れて、チャイのレシピなどをメモして、何だかほっとした顔で帰っていきます。



それが、その後、「チェブラーシカのクリスマス」今年4月の写真展「無限抱擁」、7月の「にがい涙の大地から」の上映会などのイベントで、参加者

やスタッフをほっとさせるお茶のコーナーで活躍する、鈴木優子さんとの出会いです。

「ぼくの見た戦争」高橋邦典写真展では来場者数1700人を越え、多くの方に中東で親しまれている「チャイ」を召し上がって頂いたと聞きます。

また先日「にがい涙の大地から」の喫茶コーナーの収益は、上映会の収支決算を黒字にしてくれました。鈴木さんは、事前の準備会の時に、上映会収支上、喫茶部からはどのくらいの収益が必要かを確認して、喫茶部の他の

メンバーの皆さんと協力し合って、見事目標金額をクリアしました。

お金だけでなく、喫茶コーナーがあることで、そのイベント全体の雰囲気やスタッフのリラックサ度が高まっています。私はこれを「ゆうこマジック」と名付けているのですが、今回はこのマジックの謎に迫ろうと鈴木さんを訪ねることにしました。

9月24日、松本大学中庭で「非戦フェスティバル」があり、鈴木さんが平和運動に関わるきっかけの一つになった「ぼってん×友の会」も、このイベントに参加するというので、鈴木さんご夫妻といっしょに非戦フェスティバルに参加しながら、お話を聞くことにしました。



「犯条例」を考える市民の会、「日の丸・君が代・元号」はいらない長野連絡会、「戦死者」の行方を問う連続企画実行委員会、等からのアピールなど、興味津々のプログラムが繰り広げられ、非戦カレ、コーヒー&チャイ、沖縄料理、おやき、インドサモサなどの盛り

鈴木さんは生まれも育ちも栃木で、サラリーマン家庭に育ったのですが、両親が農家の休耕田を借りて家庭菜園もしていたので、野菜は自家製を食べることが多かったそうです。信州大学繊維学部応用生物化学科の学生になり、自炊してスーパーの野菜を食べ、その味の差にびっくりして、今までがいかに、食に恵まれていたかを、初めて知ったといいます。

信州に暮らしている時に植物とふれあい、ハーブに出会い、ハーブって面白いと思う、それに関連した仕事につきたいと、東京に職場を見つけて就職しました。4年くらいその会社の広報の仕事をしてながら、ハーブの使い方を

広めるためにお店に立ったり、取材を受けたたり、ハープ教室の先生もしました。

結婚と同時に松本に引っ越しをするために退職しました。実は結婚するにあたってどこに住もうかと考えた時、夫と自分が出会うきっかけとなり、友だちや親代わりになって下さる親しい方もいる松本を選んだのです。

それまでのハープの仕事を通じてクレーム対応をする機会もありました。クレーム対応はもちろん辛い仕事ですが、クレームをわざわざ伝えるお客様も決して良い気分ではありません。むしろエネルギーがいる大変なことです。クレームをおっしゃってくださるお客様はとても大切だということや、クレームは大きなビジネスチャンスにつながるということも、ハープを通じて接客業で学ぶことができました。

松本に引っ越してからは、より様々

なコミュニケーション力を身につけたいと思い「カスタマーサポートセンター」に就職しました。良い気分や満足している人とのコミュニケーションは、自然とうまくいくことが多いです。しかし不快に思ったり不満を持っている人とうまく対応するかは、その後に大きく影響しますし、だからこそ重要なのではないかと考えます。「カスタマーサポートセンター」では確かに辛いこともありますが、それ以上に人となりがつながっていく上で、大切なポイントを実感できる貴重な体験をしています。

このポイントは国と国との関係でもきつと共通する部分があると思います。

仕事ばかりの毎日で、市民活動や平和運動に触れたことがありませんでした。しかし、ある日学生時代からの友人から「ばってん×友の会」と、その

会の目印、ばってんバッチについてメールをもらいました。ばってんバッチはかわいいし、こんな私でもできるかもしれないと、ばってんバッチを身につけることからはじめました。

「ばってん×友の会」は、2001年の9・11事件以降世界中で武力による解決を正当化する流れが加速していく中で、その流れを止めようと、毎月1回飯田下伊那地方でピースウォークを行っているおかあちゃんたちが中心になって始めた会です。その会の目印がばってんバッチで、会員はばってんバッチをつけている人です。このバッチを身につけることで「憲法九条改憲の国民投票が行われた時に、自分は×をつけます」という意思表示をするとともに、「そのバッチかわいいね、何？それ。」という会話から憲法九条のことや国民投票のことを話すきっかけをつかみ、平和を考える輪を広げていくとしています。

ばってんバッチはつけていても、なかなかそこから一步踏み出せないでいた時、日本のイラク派兵が決まったのです。私には自衛隊員になった従兄弟がいます。もしかして自分の従兄弟もイラクに行くかもしれないと思った時、イラク派兵が急に現実になり、単純にそれはいやだ、と思い、でも何もない自分に悶々としていました。

そんな時、「ばってん×友の会」を教えてくれた友人から、戦争に反対する自分のアピールをA4の紙に書き、内閣府に提出しようという取り組みがあることを聞きました。私と夫もアピールを書いて送り、それは内閣府に提出したメッセージの一つになりました。今日来てびっくりしたんですが、その時のアピールの紙が、非戦フェスティバル会場内に張り出されているんですよ。久しぶりに対面しました。

アピールは提出することができたのですが、その後イラク戦争の開戦、自

衛隊の派兵決定、イラクで日本人拘束と日本国内でのバッシングなどがあつて、「この世の中おかしい、ぜったいおかしい」という思いをかかえたまま鬱々としていました。そんな時、イラクで拘束後に解放された安田純平さんの講演会が県内何カ所かで企画されていることを知りました。本当は飯田の講演を聞きに行こうと思っていたんです、ばってんの友人もいるし…。でも、松本の講演もあると聞き、飯田のばってんの友人からの「もしかしたら新しい出会いがあるかもしれないよ」という言葉もあり、初めてひとりで松本中央公民館に足を運んでみたのです。

それまでは、平和に関することは誰かと一緒にしていたので、これは、自分の中ではかなりの勇気で、ばってんバッチからさらにもう半歩足をふみだしてみた感じでした。



メッセージと再会

安田さんのお話を聞き、テレビの報道内容に疑問を持っていた点がいちいち解消しました。そして会場を出たら高橋邦典さんの写真展実行委員募集のピラを渡されたのです。

高橋邦典さんの『僕の見た戦争―2003年イラク』という本は子どもも読める写真絵本で、平和について、戦争について、子どもも大人もいっ

しよに考えることができる本だと思っ
たのです。

この写真展の実行委員は、写真展や
市民活動は初めてのメンバーが多く、
これなら何かできるかもしれないと、
実行委員に加わることにしました。

ただ『ぼくの見た戦争』の写真展
をしたい』という思いだけで集まっ
たメンバー。初めて出会うメンバー
でしたが、約半年の準備期間を経
て、1700人以上のお客様に足を運
んでいたような写真展を開催で
きたのは、一人一人が自分にできるこ
とを最大限力を出して実行したからだ
と思います。開催に必要な運営費も、
ご来場のお客様から暖かいカンパのご
協力を頂いたことと、実行委員が力を
合わせた事により集めることができました。

そしてこの時、利益を出してナンボ

の企業で鍛えられていた鈴木さんの経
験も、大きな力になりました。

イベントでは準備を万全にしてもお
客さんが来なければ赤字になります。
できるだけ経費をかけず、来た人数に
対応する方法をとらなくてはなりません。
企業は、利益を出し続けることで
存続が可能になります。市民団体のイ
ベントでも、活動を継続するためには
利益を出すことも重要です。これはも
しかしたら、学生時代大学祭の実行委
員での経験が原点かもしれません。

おつとりと優しい口調で、厳しい指
摘が続きます。

「あの写真展を通じていろんな出会
いがあって、一年後の今日は、非戦フェ
スティバル会場内に、いろんな知り合
いがあちこちにいくつくらいになりまし
た。」

と、感慨深げな鈴木さんです。

私がこの世の中こうなればいいなあ
：という一番の夢は、『世界中の人が
毎日、今日の夕飯なに食べようかな？
と美味しい夕飯のことを当たり前に考
えられる、そして考えたものを当たり
前のように家族で食べられる。そんな
世の中になるといいなあ』ということ
です。

自分のライフスタイルというと、で
きるだけ自分や自分の周りである程度
生活がまかなえる、自給自足に近い生
活ができるというなあ。そしてその余
力で、憩いというかホッとできて、心
も体も本当の意味の健康になれる空間
の提供ができるといういいなあ、と漠然と
考えています。

けれども、その為に、腕を振り上げ
て戦争反対！とか、デモとかはまだで
きなくて、でも、自分にもできるこ

とがあるのかもと思って、それを少し
ずつ具体化しています。ばってんバッ
チがそのスタートでした。例えば、出
かけるときはなるべくハンカチとお手
拭と水筒を持っていくとか、今回みた
いなイベントの時もマイカップ、マイ
お箸の実行とか、（この日、鈴木さん
のバックからは、お茶のポットは勿論、



お目当てのビール用のコップ、お箸、
おしぼり、コート、座布団と、ドラエ
モンの何でもポケットのようにいろん
な物が出てきました。）日常できるだ
け電力を使わないとか——少しくらい
なら階段でのぼる、エアコンは使わな
いまたは最小限の利用——、ゴミの分
別／再利用とか、その前にゴミになり
そうなものは買わない——ラップフィ
ルムやアルミホイルをなるべく使わな
いなど——とか、化学合成のものは食
品でも洗剤でもできるだけ使わないと
か、できるだけ地元／国産の季節のも
のを購入するとか：本当に小さいこと
なんだけど、この積み重ねと継続が身
の丈にあった反戦（非戦）活動であり、
アメリカ追従の日本でなくなる為の、
アメリカにNO！といえる日本になる
為の、大切なことなんだと信じていま
す。

本当は、世の中が平和になる為に必
要なものは、そんなにおおげさなこと

ではなく、みんながほんのちよつと、
それぞれが思い描く方向に歩き出すこ
とで可能になるのではないかな？なん
て思ったりもします。

そしてそれを止めようとする大きな
権力に負けないためには歩き出した人
たちがつながっていくこと、そして少
しずつでも歩き続けることがとても
とっても大切なんだと思います。つな
がる／つづける／最近の大きなテーマ
です。

その為にも、昨年の私のように、最
初の一步を踏み出して、写真展や上映
会に来てくれた人が、その内容の重さ
に耐えられなくて（実際、上映会で、
気分が悪くなったり、すぐには帰れ
なくなる人もいます）心にシャッター
を下ろしてしまい、二度とそういった
イベントに足を向けられなくなること
が無いようにしたいのです。だから、



ちよっと気持ちを切り替えてはっとできるコーナー、目の前のメッセージを自分が消化できるかたちに咀嚼する時間と場所を提供するお茶のコーナーって大事だと思うのです。

続けるって本当にむずかしい。でも、鎌田さんの「あきらめない」じゃ

ありませんが、あきらめずに自分の歩幅で歩き続けることが今の私のテーマです。

今の鈴木さんからは想像できませんが、鈴木さんは以前はお肉大好き人間で、アレルギーがひどく、子供の時から薬漬けの生活をしていたそうです。その鈴木さんを今のように変えたのは、この日もいっしょにイベントに参加して、私が鈴木さんにインタビューしている間は、フェスティバルのビールの売上に多大な協力をしていた、ご主人のライフスタイルの影響だと言えます。「学生時代からの同士のようなパートナーで、いっしょにしていると元気になる人」というのが優子さんのご主人紹介でした。

いっしょにしていると「気を遣う」人、「気をそぐ」人、「気むずかしい」人、「気が滅入る」人はいっばいいますが、いっしょにいて元気になれる「気」が合う

人と巡り会うのはなかなか難しい。そんなパートナーと、『ホッとできて、心も体も本当の意味の健康になれる空間を提供する』という夢に向かって、一歩ずつ歩き出している鈴木さん、きつとあたりを暖かくしながら、着々と目標に近づいていくでしょう。

最後にJCFに何か一言とお願いたら、

「来年のチェルノブイリ20周年イベントには、事前の準備会から参加しますから、協力させて下さい！」という素敵な約束を頂きました！

来年のようこマジックが楽しみです！

(布山)

上映会 『にがいの涙の大地から』

JCFと松本市中央公民館の呼びかけで始まった「戦後60年を問う会・まつもと」。その会が主催となって取り組む最初のイベントとして、2005年7月16日(土)松本市中央公民館6Fホールにて、『にがいの涙の大地から』上映会が開催された。



この日は7月の3連休の初日。お天気があまり良いと、お客さんは郊外に出かけてしまつて客足に影響が出るのでは？と心配していたが、雨も降らず、かといって太陽がまぶしすぎるわけでもなく、ちょうど良い上映会日和だった。午前・午後・夜と3回開催した上映会には、どの会も70名前後のお客様がおみえになり、3回の合計で222名の来場があった。特に、高校生が友達や先生と一緒に来場する姿が各回でみられ、幅広い年齢層のお客様が来場されていた。また、各上映会前後に開かれた、「監

督のお話」を聞く会も、映画を見に来られた方のほとんどが参加されているようで、実際に単身で中国に入り、この映画を撮り続けた監督のお話に、熱心に耳を傾けていた。特に、第2回上映会の後に6Fホール横のホワイエにて開かれた「監督との茶話会」では、監督と進行役の川田龍平さんをお客様が囲み、皆同じ高さで、中国産のお茶を飲みながら会話をすることができた。壇上から監督がお話しているの聞くのとは違って、監督とお客様がより深いコミュニケーションを取っていたように感じた。

この『にがいの涙の大地から』は、第二次世界大戦敗戦時、日本軍が組織的に遺棄してきた毒ガスや砲弾によって、今尚中国の人々が命を奪われ傷つき苦しんでいる現実を、目の前に突きつけられる。私自身、映画を見ながら事実の恐ろしさに体が震え、時には映像から目をそむけてしまいたいようなときもあった。しかし、映像よりも現実にはもっともつと想像を絶する苦しみであり、その原因は我々日本人が作っている。だからこそ、今、自分ができるのか、何をしなければいけないのか、上映会が無事終わってから深く考える映画であった。この映画に出会うまで、自分は日本軍遺棄兵器の問題と現実についてほとんど知らなかった。それを知るときかけを与えてくれたこの映画と海南監督に心から感謝している。

鈴木優子

貝原浩さんを偲ぶ

神谷さだ子

余白先生へ

ベラルーシ、チエチエルの市役所広場を西に向かつて30メートル。道路沿いに緑のペンキが塗られた家がある。

貝原さんは、JCF訪問団の誰彼となくこのお家に誘ってくれた。貝原さんの友達だった。

いつ、どこで知り合いになったのだろう。不思議に思ったのだが、貝原さんには、そんな村人がチエチエルの何人もいた。

「こんにちは！」

笑顔で挨拶を交わしたら、自然ななりゆき、お家におじゃまし、親しい友人になつていった。ニコライさんもカーチャおばあちゃんもいつも貝原さんを待つて

いた。「ほら、日本の画家は一緒かい？」こう言いながら、片手で盃を口に運ぶしぐさ。貝原さんが、おいしそうにサマゴン（自家製ウオッカ）を飲む様に見ていた。そして、いつも貝原さんがやって来たときのためにサマゴンを仕込んでいた。

ニコライさんの家のテーブルに並んだサラ（塩漬けの豚の脂身）、よく煮込んだボルシチ、キノコのサラダ、森で摘んだベリーのジャム、全部ぜんぶ自家製で、ハジャイカ（主婦）はともてな上手だった。

ベラルーシの普通の暮らしにとけ込みながら、貝原さんはスイツと筆ペンを取りだした。ハンチングを粋にかぶったおじいちゃん、深くしわを刻んだ顔でどつしりと座るおばあちゃん、美しく、妖しいロシアの女性達、一本の筆ペンがたくさんのロシアを描き出していった。



『風下の村から』（1992年）。私たちが、この画文集から受け取ったものはなんてたくさんあることだろう。タルコフスキーの『僕の村は戦場だった』を彷彿とさせる埋葬の村のベチカの残骸。石棺で覆われた4号炉では実感がわかなかったチエルノブイリ原発事故の刻印を貝原さんは、私たちの前にみせてくださった。

そして、同じ和紙にロシア・ベラルーシの大地で紡がれる人々の暮らしの確かさがあつた。人々のおおらかな暮らしがそのまま伝わってきた。私たちが、かの大地からいただいた心のよりどころだった。

今、「グラランド・ゼロ」のバックナンバーを繰っている。題字「グラランド・ゼロ」はもちろん貝原さんが書いてくれた。そして、見出しとコミカルなイラストに、その時々私たちの活動が蘇ってくる。

あなたは、グラランド・ゼロに立つ



男。いや、描いた形象の余白に、あなたの少しはに自分で、ちよつと皮肉っぽい表情が振り向いているような気がする。

余白先生

一本の鉛筆で一本の筆ペンで、余白先生が描かれたたくさんの作品に、私たちは囲まれています。

これから、あなたのお骨をベラルーシ、チエチエルの市役所広場を西に向かつて30メートル。道路沿いに緑のペンキが塗られた家がある。スケッチブックを片手に歩いていたあの大地に一緒に行きましょう。



こんにちは！

Здравствуйте!

JIM-NET

Japan Iraq Medical Network



JIM-NET ホームページ
<http://www.jim-net.net/>

傷ついた人たちが完治するということではありません。そこで、殊に白血病に関しては長期間に渡って一貫した医療支援のためのネットワークを作り調整を図れるようにJIM-NETを立ち上げました。ネットワークの構成団体は今、7団体です。そのひとつがJCFで、実際の医療支援にこれまで培

ってきた白血病支援のノウハウを役立ててもらっています。そのほかにもカンパなど多くの人に支えられています。

松本の事務所では、さまざまな事務のほか、公開の報告会を企画したり、イラクの子どもの描いた絵画展の開催希望を調整したりしています。その他、書籍やCD、絵はがき、缶バッジなど、さまざまな催しなどでイラクのことを知ったり考えたりするきっかけになるようなグッズを揃えています。ホームページも随時更新していますので、ぜひアクセスしてください。

JIM-NETスタッフ
 小森 麗子

JIM-NET 事務局です！

カンパッチ作成で大忙しの小森さん



アンマンに事務所があります。イラクの人たちへの医療支援をするネットワークが必要になってJIM-NETが立ち上げになり、この6月から本格的に稼働し始めたところです。「今もイラクは大変！」というのはもちろんそうなのですが、どうして今イラクの人たちへの医療支援ネットワークが必要になったのかということを今日はJIM-NETの自己紹介も兼ねて書こうと思います。

1991年からの湾岸戦争以降、イ

ラクでは白血病やガンになる子どもの数が増えています。

その後、国際社会がイラクに課したのは、国連決議によるイラクへの経済制裁ですが、これによってさまざまな薬が入らず、また病院施設自体も老朽化してしまっています。

驚かれるかもしれませんが、湾岸戦争以前には、イラクの医療水準は高くして周辺の国から治療に来ていたくらいなのです！イラクのお医者さんにはイギリスなどへ留学経験のある人たちもいます。治療技術を持っていますが、薬が入ってこないために患者が死んでいくということがこれまで続いてきましたし、その状況は2003年からのイラク戦争以降も大きく変わってはいません。

特に白血病の場合、治療には複数の薬が治療の進捗にあわせて必要になります。治療期間もかかります。なので、一回まとめて薬を送ったら戦争で

ニュースクリップ

< 国 内 >

●核燃料プールでまた水漏れ

日本原燃は、使用済み核燃料再処理工場で燃料貯蔵プールから放射性物質を含む水が漏れたと発表した。作業員の被ばくや周辺への影響はないという。(6月9日 共同通信)

●放置ウラン残土、米に輸出へ

核燃料サイクル開発機構が、鳥取県湯梨浜町方面地区に放置してきた放射能を帯びたウラン残土約3000立方メートルのうち、放射線レベルが高い約290立方メートルを米国に輸出して撤去する方針を固めたことが分かった。

(6月12日 毎日新聞)

●原研東海、また原子炉手動停止

日本原子力研究所東海研究所で、運転中の原子炉(JRR-3)の一部から潤滑油が漏れていることが分かり、原子炉を手動停止した。東海研究所では今年に入ってから、ほかの原子炉も含めトラブルが相次ぎ、原子炉の手動停止はこれで4回目。

(6月19日 時事通信)

●政府、ITER誘致断念

日本と欧州連合(EU)が誘致合戦を続けてきた国際熱核融合実験炉(ITER)の交渉で、政府は実験炉本体の誘致を断念する方針を決め、EU側に連絡した。

(6月22日 毎日新聞)

●もんじゅ訴訟で再審請求

高速増殖炉原型炉「もんじゅ」の設置許可をめぐる行政訴訟で逆転敗訴が確定した住民側が、「最高裁判決には訴訟手続き上重大な違法がある」として、最高裁に判決の破棄を求め再審請求した。

(6月28日 共同通信)

●福島第一原発1号機が再起動

東京電力は、2002年に発覚した一連のトラブル隠し問題を受けて停止させた全17基の原発のうち、唯一運転を再開していなかった福島第一原発1号機の原子炉を再起動した。

(7月8日 共同通信)

●被爆者の7割がいつも不安

日本原水爆被害者団体協議会が広島、長崎で被爆した人を対象に実施したアンケートで、回答

者の約7割が被爆から60年間、健康に不安を感じ続けていることが明らかになった。

(7月22日 共同通信)

●原子力政策大綱案を作成

原子力政策の基本方針となる長期計画を改定している国の原子力委員会新計画策定会議は、次期計画となる「原子力政策大綱案」をまとめた。原発からの使用済み核燃料を全量再処理する核燃料サイクルの堅持を基本としつつ、将来の不確実性に対応するため、再処理せずに直接埋設する「直接処分技術の調査研究」を初めて明記した。

(7月28日 共同通信)

●福島第一原発1号機停止

福島第一原発1号機のタービン建屋地下1階の床に漏れ出た水から、自然界の約1万倍にあたる量の放射性物質トリチウムが検出された問題で、東京電力は原因を調べるため運転を停止した。

(8月11日 毎日新聞)

●地震で女川原発が停止

宮城県沖を震源とする強い地震で、東北電力の女川原発1～3号機が自動停止した。

(8月16日 毎日新聞)

●女川原発で想定超える揺れ

16日の地震で揺れの指標となる加速度が女川原発1号機で最大251ガルを記録し、過去の歴史から同原発周辺で起こり得る最強の地震を想定した「設計用最強地震」の250ガルを超えたことが分かった。

(8月17日 共同通信)

●福島原発、地震で核燃料プール水漏れ

東京電力は、16日の地震で福島第一原発2、6号機、第二原発4号機の原子炉建屋内で使用済み核燃料プールの水面が揺れ、空調ダクトから放射能を帯びた水計約24.5リットルが漏れたと発表した。

(8月17日 共同通信)

●もんじゅ、運転再開へ改造工事

95年12月のナトリウム漏れ火災事故で運転を停止している核燃料サイクル開発機構の高速増殖炉「もんじゅ」で、運転再開に向けた改造工事が始まった。工期は約1年半で、試験などを

経て08年初めにも運転を再開する予定。

(9月1日 毎日新聞)

●日本のプルトニウム43トンに

文部科学省と経済産業省は、2004年末時点で日本が国内外に保有する分離プルトニウムが、前年より約2.5トン増えて計約43.1トンになったと原子力委員会に報告した。

(9月6日 共同通信)

●核査察強化委の設置決定

国際原子力機関(IAEA)定例理事会は、秘密核開発の探知など保障措置(核査察)強化策を専門に検討する委員会を理事会内に設置することを全会一致で決定した。

(6月17日 共同通信)

●核融合炉は南仏建設で決着

国際熱核融合実験炉(ITER)計画に参加する日本や米国など5カ国と欧州連合(EU)の関係閣僚が、モスクワで会合を開き、実験炉本体を南フランスのカダラッシュに建設することで合意した。

(6月28日 共同通信)

●線量限度の被ばくで発がん

放射線被ばくは低線量でも発がんリスクがあり、職業上の被ばく線量限度である5年間で100ミリシーベルトの被ばくでも約1%の人が放射線に起因するがんになるとの報告書を、米科学アカデミーが世界の最新データを基にまとめた。

(6月30日 共同通信)

●チェルノブイリ、作業員被ばくで工事停止

ウクライナのチェルノブイリ原発で、1986年に放射能漏れ事故を起こした4号機を「新石棺」で覆う準備工事が、作業員被ばくで3カ月間、停止していたことが明らかになった。

(7月27日 共同通信)

●イラン、ウラン転換作業を再開

イランは、イスファハン近郊の核施設でウラン転換作業を再開したことを明らかにした。EU当局者は、イランがウラン転換作業を再開すれば、核問題を国連安全保障理事会に付託し、制裁を行う可能性がある」と警告していた。

(8月8日 ロイター)

●女川原発、耐震性への懸念相次ぐ

原発の耐震設計指針を見直している原子力安全委員会の分科会が開かれ、8月の地震で、東北電力女川原発での揺れが一部で「設計用限界地震」を超えたことを懸念する声が委員から相次いだ。委員の石橋克彦神戸大教授は、原子力安全・保安院に対して「宮城県沖地震で耐震安全が確保されることを確認するよう、東北電力に指示してほしい」と注文をつけた。

(9月9日 共同通信)

< 海 外 >

●イラン大使、米が説教者とは皮肉

IAEA緊急理事会で、イランのナセリIAEA担当特使が演説し、地球上で二度、核兵器の惨禍をもたらした唯一の国が原子力の分野で説教者の役割を自任しているのは「最もばかげた皮肉だ」と述べ、イランの核計画を非難し続けている米国を批判した。

(8月10日 共同通信)

●IAEA、イラン非難決議採択

IAEAの緊急理事会は、EUを代表して英仏独3カ国が上程したイラン非難決議を全会一致で採択した。決議採択後、イラン代表団は今後もウラン転換作業を継続する考えを示唆した。

(8月12日 毎日新聞)

●チェルノブイリ事故、死者は最大4000人

IAEAと世界保健機関(WHO)、国連開発計画(UNDP)は、1986年4月のウクライナ・チェルノブイリ原発事故の影響に関する調査報告書を発表した。被ばくによる死者については最大で4000人に上ると推定、数万人とされたこれまでの数字を大きく下回るとしている。報告書は、環境破壊についても懸念されたほどではないと結論付けた。

(9月6日 時事通信)

●チェルノブイリ原発死者数報告書に批判

チェルノブイリ原発事故についてIAEAなどがまとめた報告書について、国際環境保護団体グリーンピースなどから「まやかしだ」とする批判の声が出ている。ウクライナ議会関係者は「政府の間違ったデータに基づいている」と反論。環境団体も「原子力への不信感を和らげ、原子力利用促進を狙うもの」と批判した。グリーンピースの担当者「多くの疑問が残されており、結論づけるのは時期尚早」と指摘する。

(9月10日 共同通信)

イラク 占領と核汚染

森住 卓



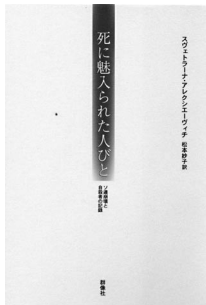
イラク 占領と核汚染
著者：森住 卓
発行：高文研
定価：2100 円（税込）

Book

米英軍のイラク攻撃は、イラクの人々に何をもたらしたのか。イラク戦争開戦前夜から占領下にかけて前後5回、イラク各地取材。軍事占領と劣化ウラン弾、イエローケーキなどによる放射能に苦しむ人々の姿を、鮮烈な写真と文章で伝えるフォトドキュメント。

死に魅入られた人びと

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ



死に魅入られた人びと
著者：スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ
訳者：松本妙子
発行：群像社
定価：2100 円（税込）

Book

ひとりひとりの人生を飲み込んできたソ連という国家の崩壊のあとに、新しい社会に放り出された寄る辺なき人たち。自らの死を選ばざるをえなかった無名の人たちの肖像だけをじっと見つめ、社会主義国家という歴史から消えた巨大な亡霊といま一度向き合う。『チェルノブイリの祈り』の著者によるインタビュ集。

プーチニズム 報道されないロシアの現実

アンナ・ポリトコフスカヤ



プーチニズム 報道されないロシアの現実
著者：アンナ・ポリトコフスカヤ
訳者：鍛原多恵子
発行：NHK 出版
定価：2205 円（税込）

Book

北オセチア学校占拠事件が起きた時、対策本部の最優先事項は、人質の救出ではなくプーチンの意向を知ることだった。人命よりもイデオロギー、対話よりも絶対服従。プーチン主義に覆われつつあるロシアの現実を、西側諸国に向けて訴える。『チェチエンやめられない戦争』の著者による渾身のルポルタージュ。

隠されたヒバクシャ

グローバルヒバクシャ研究会



隠されたヒバクシャ
監修：前田哲男
編著：グローバルヒバクシャ研究会
発行：凱風社
定価：3150 円（税込）

Book

1954年に太平洋マシーシャル諸島で行われた水爆実験は、半世紀経った今でも、島民の伝統的な暮らしや文化に大きな変容をもたらした。「死の灰」がもたらした汚染と後障害の全容、「人体実験」疑惑の真相は、米政府の核政策により隠蔽され続けている。住民の証言や米公文書の分析などにより、核実験による被災の実態と責任を検証する。

ふたつの黒い雨

PIKADON PROJECT



ふたつの黒い雨
著者：PIKADON PROJECT 事務局・編
発行：アートン
定価：1680 円（税込）

Book

ヒロシマ・ナガサキの惨劇から「戦争と生」を見つめ直そうと、イラストレーターの黒田征太郎さんらアーティストが活動する「ピカドン・プロジェクト」の一環として出版されたCD付き絵本。CDには「黒い雨」（唄・古謝美佐子）、「心の街」（唄・都はるみ）の二曲を収録。

東海村臨界事故への道

七沢 潔



東海村臨界事故への道
著者：七沢 潔
発行：岩波書店
定価：2730 円（税込）

Book

被曝事故はなぜ起こったのか？関係者への取材や裁判記録を通して浮かび上がってきたのは、単なる作業上の不注意ではすまされない、JCO、動燃、科技厅、原子力政策をめぐる官業の癒着構造による複合的な要因だった。日本の原子力政策の軌跡をたどりつつ、安全コストがいかに見過ごされたを明らかにする。



第 65 号

発行日 2005 年 9 月 26 日

発行人 鎌田 實

発行所
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 武内 裕子

重岡 朱

表紙デザイン 酒井 隆志

スタッフ 神谷 さだ子

布山 みな子

協力 風樹 光

片岡 寿美子

オフィス エム

印刷 電算印刷

■編集後記

母から譲り受けた古い鉢植えのゴムの木がある。最近元気が無く葉が落ちるようになり、もう枯れてしまうのではとがっかりしていた矢先、鉢の根本から新しい芽が出て双葉が開いた。古びた鉢の中の、柔らかな緑のまっすぐな芽は、何だか感動的な姿だった。広島で被爆し、五日間生死の境を彷徨った笹森さんを正気に戻させたのは赤ちゃんの泣き声だったという。新しい命は不思議な力をもっている。JCF も新しい名前を得て、新たな一歩を踏み出したい！
(布山)

■事務局日誌■

< 7 月 >

- 1 日 アルプスフロント市民フォーラム理事会 (JCF 事務局)
- 6 日 『にがい涙の大地から』プレイベント (松本中央公民館)
- 13 日 グランドゼロ第 64 号発送作業
松本市立開成中学校職業体験
- 14 日 JIM-NET 報告会 (松本中央公民館)
- 16 日 『にがい涙の大地から』上映会 (松本中央公民館)
- 28 日 JIM-NET 会議 (東京)
- 30 日 アルプスフロント市民フォーラム・サマーフェスタ (蔵シビック館)

< 8 月 >

- 9 日 「ヒロシマからチェルノブイリへ」講演会 (松本中央公民館)
- 14 日 JIM-NET 報告会 (東京・カタログハウス)
- 19 日 JCF スタディツアー・ME チーム打ち合わせ (JCF 事務局)
- 26 日 JCF スタディツアー出発
- 30 日 「戦後 60 年を問う会・まつもと」ミーティング (松本中央公民館)

< 9 月 >

- 3 日 JCF スタディツアー帰国
- 4 日 JIM-NET 第 3 回アンマン会議
- 11 日 松本第一高校文化祭講演
- 16 日 NPO 学習会 (松本中央公民館)
- 20 日 「戦後 60 年を問う会・まつもと」ミーティング (松本中央公民館)
- 28 日 チェルノブイリ 20 周年イベント打ち合わせ (松本市内)
- 30 日 第 81 次訪問団出発

< 10 月 >

- 7 日 第 81 次訪問団帰国

チェルノブイリ原発事故から 20 年メモリアルイベント (予定) 医療支援と交流～ JCF 15 年の歩み～

●開催予定 2006 年 4 月 8 日 (土)～5 月 7 日 (日)

●開催会場 松本市美術館、まつもと市民芸術館

☆医療専門家によるパネルディスカッション

☆交流を紡ぐ

鎌田 実 × 本橋 成一 × 坂田 明 ミニコンサート

「チェルノブイリのミジンコ」映像とトーク

☆「子どもたちと絵の交換」～ベラルーシへイラクへ絵を送ろう～

☆「未来への誓い」～映画上映と若者とのトーク～

映画「ナージャの村」「アレクセイと泉」上映

☆田口ランディ講演会

◎本橋成一写真・映像展「ナジェージダ(希望)」の開催

チェルノブイリ三部作「無限抱擁」「ナージャの村」「アレクセイと泉」



JCF、法人格取得のご報告

JCF は、皆様のご支援に支えられてチェルノブイリや、イラクの子ども達の医療支援を続けてきました。

今後の支援の輪を広げるために法人格取得の手続きをしてみました。9 月末日に認証されましたので、今後は正式名称が「特定非営利活動法人日本チェルノブイリ連帯基金 (JCF)」となります。

今後も変わらぬ応援を、どうぞよろしくお願い致します。

特定非営利活動法人 日本チェルノブイリ連帯基金 (JCF)

●本部 〒390-0303

長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263- 46- 4218 FAX 0263- 46- 6229

E-mail jcf@jca.apc.org

Website http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京 〒164-0003

東京都中野区東中野 4-4-1 ポレボレタイムス社気付

TEL03- 3227- 1405 FAX03- 3227-1406

●京都 〒607-8405

京都府京都市山科区御陵田山町 13-3

TEL075- 591- 7772